

## 人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	価値的・態度的側面のみならず、知識的側面や技能的側面に関する指導がバランスよく行われ、実践力・行動力の育成につながっている事例
-------	---

### 1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

大阪府松原市

学校名

松原市立布忍小学校

学校のURL

<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/nunose/>

### 2. 学校紹介

学級数

【学級数】13学級、【特別支援学級】2学級、【合計】15学級

児童生徒数

【全児童数】427人（平成23年5月1日現在）  
（内訳：1年生76人、2年生75人、3年生68人、4年生70人、5年生63人、6年生75人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

#### 【めざす子ども像】

- 自分と家族、地域をほこれる温もりのある心
- 人権を大切にする豊かな心
- 基礎的・基本的な学習の確かな学び
- 未来に夢を育み、社会の変化に対応した学び

#### 【育てたい6つの力】

- 自分や家族・地域を誇れる力
- 仲間や他者に共感できる力
- 理由や根拠をもとに気持ちや考えを伝え合う力
- 違いを認め合い、差別や不正を見抜く力
- 進んで行動し問題解決する力
- 人権尊重の社会づくりに参画する力

人権教育にかかる取組の全体概要

布忍小学校を含む松原第三中学校区は平成20～22年度に文部科学省より「人権教育総合推進地域事業」の研究指定を受け、「心・技・知を結ぶ人権尊重のための実践的行動力の育成」をテーマに、「人権教育の指導方法等の在り方について」をふまえた幼・小・中の人権教育の一貫したカリキュラムづくりについて研究を進めてきた。布忍小学校においては、「人権教育の指導方法等の在り方について」を踏まえ、人権学習を以下の3つの柱として取組を整理し、カリキュラム化に向けた研究を進め

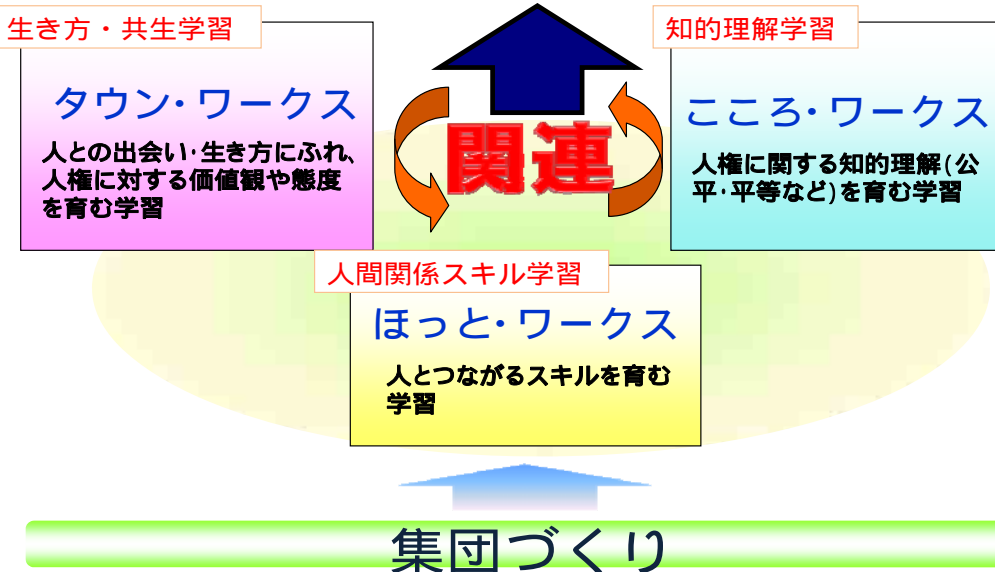
てきた。そして日常の集団づくりを土台に相互の関連を大切にしながら取組を進めている。

- 人との出会いや生き方にふれ、人権に対する価値観や態度を育む「タウン・ワークス」
- 人とつながるスキルを学ぶ「ほっと・ワークス」
- 人権に関する知的理解をはぐくむ「こころ・ワークス」



## 布忍小学校の人権・こころの教育

### 豊かな心と人権感覚・実践的行動力の育成



#### **生き方・共生学習** ... 「ぬのしょう、タウン・ワークス」

「ぬのしょう、タウン・ワークス」は従前よりの取組みを継承しながら、今日的な教育課題と多様な人権課題を結んでカリキュラム化した「総合的な学習の時間」の取組みである。幅広い地域人材を活用した地域とのネットワークを基盤に、選択・参加・体験的な学習形態をとりいれている。

#### **人権の知的理解学習** ... 「こころ・ワークス」

「こころ・ワークス」は公平や平等など、人権についての基本的な概念を「生きた知識」として獲得する学習である。子どもたちが人権に関わる様々な場面で、自ら考え、正しく判断するための「ものさし」(共通の視点)を学び、それを基に考え、判断し、行動できる力を育てることをねらいとし、取り組んでいる。

#### **人間関係スキル学習** ... 「ほっと・ワークス」

「ほっと・ワークス」は、望ましい人間関係を培うために必要なスキルを獲得し、豊かなコミュニケーション力を高めていく学習である。「ほっと・ワークス」では、ゲームやロールプレイなどの体験をとおして、人と関わることの楽しさ、気持ちを伝えることの喜びを実感し、思いを共感し合う人間関係スキルを学ぶ。

### 3. 特色ある実践事例の内容

<人権に関する知的理解を育む「こころ・ワークス」>

布忍小学校には、人の思いを深く受け止め、差別や不当な事柄に対する気づきや怒りを持つことができるなど人権感覚に鋭い子どもたちが多い。しかし、自分の思いを他の人にわかるように表現することができず、感覚的な言葉で表現してしまい、相手に伝えることができない場面などが多々見られる。そんな子どもたちに、自分の思いを的確に表現する力、明確な根拠を持って説明する力を付けてやりたいと考えた。

そこで、「こころ・ワークス」では、平等や公平、正義など人権に関わる基本的な概念を、「生きた知識」として獲得させることをねらいとしている。そして、日常生活の中にある人権に関わる場面を想定し、その場面で、正しく判断する共通の視点(「ものさし」)に基づいて考え、行動する力を育むことを目標とした。

《学習のねらい》

人々の長い間にわたる人権確立への努力や勇氣ある行動について、自分自身や現代の社会と関連づけて理解すること。

差別や不合理に対して、根拠に基づいて主張し、考えを伝え合える力を育てること。  
これらをとおして、人権尊重の社会づくりへの主体的な参画意識を育成すること。

《取組の特色》

歴史学習を通して、現代につながる人権確立のために立ち上がった人々への共感と誇りを大切にす。

人権について考え、判断する「ものさし」としての知識を獲得する。

身近な問題を通して、地域・社会の一員として考える学習とする。

根拠や理由に基づく話し合い活動をとおして、考えを深め合う。

具体的には、各学年の「タウン・ワークス」のテーマと関連させ、1・2学期にそれぞれ3時間程度をひとまとまりとして取り組んでいる。

<具体的な実践事例>

5年生 「それはきめつけじゃないの？」

1学期の「タウン・ワークス」の国際理解学習においては、出会ったその人を知ることを通じた国際理解への意欲や学習の意識づけを大切にしている。また、2学期には、「自分史」の学習に取り組み、聞き取りなどを通して、一人ひとりがかげがえのない存在であることを学んでいる。そこで、「こころ・ワークス」の学習を通して、偏見や決めつけを見抜き、それを論理的に伝えることができる力を身につけさせたいと考えた。そのために、「それは本当に事実か?」「一つの事実を広げていないか」という2つの視点を導き出し、「心のものさし」(判断の基準)として考えさせるようにした。

<指導計画>

第1時 「決めつけ」かどうかを見分ける2つのものさし「心のものさし」を学ぶ。

第2時 「心のものさし」を復習し、偏見の意味と不公平さを知る。

第3時 「心のものさし」を使って、偏見について考える。

<本時のねらい>

「決めつけ」かどうかを見分ける2つのものさし「心のものさし」を学ぶ。

本当に事実か                      一つの事実を広げていないか

<本時の展開>

1 タウン・ワークスで出会った人たちからのメッセージを思い出す。

- 「出会った人を大切に」
- 「同じ人間として接して」
- 「人を見た目で判断しないで」

2 事例1について全体で考える。

ぬのせ公園を管理しているおじさんが、公園に行ってみると、お菓子などのゴミが散らかっていたり、花壇が荒らされていたりするのを発見しました。近所の人に聞いてみると、小学生がやっているという噂です。「けしからん！」と怒ったおじさんは、「小学生立ち入り禁止」という看板を公園の入り口に立てました。

みなさんは、この話を聞いてどう思いますか？

自分の意見を発表する。

納得できるか・できないか。(そう思う理由も言う)

3 事例2について考える。

小学生の意見を聞いたおじさんは、やっぱり噂だけで判断してはいけないと思い、自分で公園を見に行きました。すると、そこには数人の小学生がいてお菓子を食べていました。そして、その側にはお菓子のゴミが散らかっています。「やっぱり小学生か！」と怒ったおじさんは、前よりも大きな字で「小学生立ち入り禁止」と書いた看板を何カ所にも立てました。

みなさんは、この話を聞いてどう思いますか？

自分の考えをもつ。

班で話し合う。

全体で交流する。

4 偏見や不公平を見分けるためには、「心のものさし」(判断の基準)が必要であることを知る。

学習した感想を交流する。

[ 児童の感想 ]

うわさだけで判断してはいけないと思って公園に見に行ったら、小学生がゴミを散らかしていたからこれは「事実」。だから「小学生立ち入り禁止」の看板を書くのも仕方ないと思う。

小学生全員でやっているわけじゃないから、ゴミをほかにしている人に注意したらいいと思いました。それでもほるのであれば、その人たちにもう来ないように言えばいいのじゃないかなと思いました。

おかしを食べていたのは事実だけど、見た目で判断していると思う。ただ小学生に見えただけかも知れないから。それに、小学生だったとしても、ゴミを散らかしたのは全員じゃないから、わたしは納得できません。

小学生数人だけなのに、みんなを立ち入り禁止にするのはおかしいと思いました。それにゴミを散らかしている現場を見たのなら、小学生数人に直接注意すればいいと思います。

ゴミをほかすのはいけないなと思いました。けど、ゴミをほかにしているところを見たのなら、注意をすればいいと思います。同じ看板を出すのなら「小学生立ち入り禁止！」ではなく「お菓子を食べた後のゴミは、ゴミ箱へほかしましょう」を何カ所にも立てる方がいいと思いました。

#### 4. 実践事例の実績、実施による効果

この学習のあと、見つけた「心のものさし」をもとに、第2次では偏見の意味と不当性について学び、第3次では、日常の掃除の場面を取り上げ 固定的な性別役割分担について学習を進めた。

学習にあたっては、一人ひとりに、個々の事例について「納得できるかどうか」「なぜそう考えたか」をじっくり考える時間を十分にとるようにした。また、意見の交流を通して友だちの意見を聞いて気づいたことから学びを深めることを大切にした。

学習を通して、普段、気持ちを伝えることが苦手で感性的な表現をよくしていた子どもたちが、示された事例を自分自身の家族の生き方と重ねて考え、一生懸命友だちに伝えようとしていた。また、そんな仲間が伝えようとするのをじっくり聞き、わかってもらう子どもたちがいた。学習をとおして、つながろうとする子どもたちの姿が光って見えた。また、この学習は、子どもたちの日常の集団づくりにもつながった。本時の教材で取り上げたように、一方的な思い込みや決めつけにより誤解やトラブルにつながるようなことは、子どもたちの日常でもよく生起することである。この学習の後、日常のトラブルについて考える際にも、「それは本当に事実か?」「一つの事実を広げていないか」という「心のものさし」を与え、それを使えるように指導を重ね、子どもたちは、一定その視点で自分や友だちの言動をふりかえることができるようになってきた。

この学習をふまえ、6年生では、「タウン・ワークス」でヒロシマ修学旅行や進路・生き方学習を通して出会った多くの方々の生き方に学んだあと、「こころ・ワークス」で「平等・差別」についての学習をした。子どもたちは、具体的なケースをとおして進路や職業を選択する際に、一見平等に見えても、実質的な不平等が隠れている場合があることに気づいた。また、社会科の歴史の学習をとおして、「今の社会で人権が守られているのは、当時の人々の立ち上がりとがんばりがあったからだと思う。」という感想にもあるように、基本的人権は、差別に抗して立ち上がった多くの人々の努力と尊い犠牲によって獲得されてきたものであることを理解することができた。

## 5. 実践事例についての評価

研究にあたり、教職員がそれぞれ意見を出し合い、めざすべき子ども像を共有し、「人権学習を通してつきたい力」を作成した。そして、「人権教育の指導方法等の在り方について」をふまえ、これまで取り組んできた参加体験型の「タウン・ワークス」を軸に、「ほっと・ワークス」「こころ・ワークス」をそれぞれ関連させた人権学習のカリキュラムづくりを進めていった。さらに、これらを中学校区の一中二小二園、五校園の協働の取組として展開され、それぞれの立場で11年間をとおして子どもを育てるという共通認識を深めることができた。

具体的な成果として、

中学校区として、「人権の知的理解」「生き方・共生カリキュラム」「人間関係スキル学習」のそれぞれについて子どもの発達の段階に応じた11年間の協働のカリキュラムをつくりあげることができた。

校区の教職員によるカリキュラムの練り上げや研究者などからの指導助言を通して、指導方法の工夫・改善がすすみ、人権学習の指導のスタイルが共有できた。

取組を通して教職員の人権教育についての理解が深まった。特に、経験年数の少ない教職員の人権意識が高まり、人権を大切にする学校づくりにつながった。

等があげられる。引き続き、他校種の取組に互いに学び合うことを大切にしながら、人権学習の指導の充実に向けた研究をすすめ、カリキュラム・指導方法の充実を図っていきたい。

## 【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

松原市立布忍小学校

これまでの数十年にわたって重ねてきた実践を踏まえつつ、「人権教育取組状況調査」で全国的に弱いとされた領域に焦点を合わせて総合的な取組を進めている。たとえば、教育目標として「違いを認め合い,差別や不正を見抜く力」「進んで行動し問題解決する力」など批判的思考や行動力といった項目が積極的に挙げられている。これらはいずれも先の調査で全国的に弱いとされた領域である。しかも,これらの内容は布忍小学校単独で進められているのではなく,中学校区全体の取組の一環として展開されている。「特色ある実践事例の内容」として紹介されている取組においても,「きめつけ」の問題点を見抜くために「心のものさし」というわかりやすい言葉で,確かな観点を子どもたちに提供している。どう行動すればよいのかという点も,わかりやすく位置付けられている。設定が具体的で確かであるだけに,日常生活に現れる成果も具体的に見えやすくなっている。